

「原爆文学」の周辺

——『沈黙の艦隊』を巡って——

田崎 弘章

緒言

「核兵器」というものが、消し難くこの世に存在している限り、それに纏わる言葉もまた、不断に紡ぎ出される。その意味で「原爆文学」は、決して過去のものとはなり得ない。意匠を変えながらも、様々な表現形態の中に「原爆文学」は出現するであろう。

本稿は、様態を変えながら立ち現れる「原爆文学」の可能性を、主としてサブカルチャーとして括られる領域に追うことを試みる。

* * *

かわぐちかいじの劇画『沈黙の艦隊』は、夏目房之介の論考『マンガと戦争』（講談社新書・一九九七年一月二〇日）にも取り上げられているとおり、「戦争物」の娯楽作品である。しかし、「戦争の廃絶」「核兵器の廃絶」を主要なモチーフにしているため、優

れた「政治物」として読まれ得る側面も持っている。実際、作品の中では、日本国総理大臣とアメリカ合衆国大統領は大きな役割を担わされており、その発言は「日米安全保障条約」「非核三原則」等を踏まえた対話シミュレーションとして興味深い。例えば、我々は次のような日米首脳による交渉の「言葉」をどのように読むべきであろうか。

米大統領「私が欲しかったのは、日本の勝手な主張ではない。反省だ!!それでは、わが合衆国は、愛をもって日本政府に要求したい。日本人は現在世界において富を奪い続ける恐れべき秩序破壊者となっていることを認識していない。その上『やまと』と組んで核を保有、世界の軍事バランスを崩そうとしている。世界に例を見ない日本の同質性、閉鎖性社会を外圧で打ち破らない限り、この性質は直らないものと判断する。よってわが国はソ連・欧州と連合し、日本の社会の根本を改革するよう次の決議を採択した。海外にある工場設備など実物資産および日本政府・企業・個人の所有する金融資産を接収する」

日本代表「なに!!」

米大統領「原油および穀物等の輸出入の完全封鎖。企業間の株式の持ち合い禁止。全国銀行の解体。教育制度の改革。国防力の削減。現政府の解体。」

日本首相「主権侵害だ!大統領、お待ちください!!」

(中略)

米大統領「日本が要求を退け、『やまと』を援護する場合、直ちに第2プランの実施を考える。」

日本代表「第2プランだと!」

米大統領「日本占領だ。」

日本代表「占領!!」

(中略)

日本代表「ハッキリ言うておく。武力衝突となっても日本は退かんどぞ!日本は現有勢力の全てを賭けて応戦に出る。そうなれば核を使用するしなにかかわらず互いに相当の被害が出るだろう。万一アメリカが海洋戦に勝利したとしても、たとえ日本全土を占領したとしても戦闘は終わらん!日本全土を占領すると、どのくらいの兵力と資金が必要か、お前らちゃんと計算したのか!そんな莫大な金を必要とするデータラメな作戦をアメリカ国民が許さないことはわかっているはずだ。それでもそんなムチャを言うのは海江田の出現がどんな現実を切り拓いたのかにアメリカが気がついたからだ。それは歴史の必然!!大国が武力で他国を押さえこめる時代は終わったという現実だ。アメリカは海江田の主張の現実の前にいらだっているのだ!しかし、この流れを止めることは誰にもできん!!」

(中略)

米大統領「それで一体、日本は何がしたいと言うのか?」

日本代表「われわれは海江田の行動を日本へのメッセージと解釈したのだ。われわれは海江田の意思に応えるつもりだ。」

即ち、日本はアメリカから軍事的にも独立するということだ!軍事的独立とは自分の国は自分で守るということだ!!」

米大統領「つまりアメリカの力を借りない。在日米軍は出て行け。基地を撤収しろ:と言うわけだな。」

日本首相「いえ大統領。アメリカとは今後も友好国として」

日本代表「どの国といえど他国の主権を奪う権利はない!」

米大統領「虚言を弄すな!!パックス・アメリカーナの下で大した防衛努力もせず、ひたすら経済力を身につけることに専心し、豚のごとく太ったあとは、守ってくれた恩人に出て行けとは何という身勝手な民族か!」

日本代表「前にも言った。われわれはアメリカに対し多大な感謝をしている。だからといって内政干渉することこそ、身勝手ではないのか」

米大統領「どうやらわれわれは最終的な結論に達しようだな。それで日本はどうやって国の安全を守る気か!」

日本代表「他国を攻撃せず守ることに徹する『専守防衛』だ」

米大統領「この核戦力の時代において第一撃を受けることは即滅亡ということだ。『専守防衛』などというお題目はオムレツを作るのに卵を割らないと言っているようなものだ。本日1800までに日本が護衛艦を引き揚げぬ場合、これをわが国に対する明瞭な攻撃意思と認め、わが太平洋艦隊は総攻撃に入る。と同時に日本占領を実施する。」

米高官「議会をどう説得して大量の兵を動かす気だ。日本の抵

抗にあえば第2のベトナムになりますぞ！」

米大統領「私はジョンソンではない。私の占領策はきわめてシンプルだ。現在、北太平洋でソ連を監視しているミサイル原潜のことをご承知と思う。その中のたった1隻でいい。核ミサイルを東京と大阪にセットすれば、『核』を持たない日本は、永久に身動きどころか声を上げることすら出来ぬようにロックされる!!これが核の時代の占領だ!!この戦争で『やまと』がもし『核』を使用するならば、世界の誰も神さえもこの私を非難することはないだろう。」

(VOYAGE 57・58・59「日本再占領プログラムⅠ・Ⅱ・Ⅲ」)

この交渉劇には、戦後の日米関係を総括して読者に提示しようとする作者の意図も見え隠れしているが、荒唐無稽さをもとより堂々と前提とし得る劇画表現が、その強みを十分に発揮し、日本人（日本民族）による核武装が成立した後、それも使用可能性が顕在化した後の日米関係を思考実験することに成功している。

これに対し、日本人による日本国の核武装計画が現実の政治家の口の端に上った時、何が起きるのか。二〇〇二年五月末から六月上旬にかけての日本の新聞紙面はそれを教えてくれる。当時の新聞報道の概略を次に纏めてみた。

二〇〇二年五月一三日、安倍晋三官房副長官は、非公開の講演で、「小型であれば原子爆弾の保有も問題ない」と発言した。三日午後記者会見において、この発言に対する見解を訊かれた

福田康夫官房長官は、核兵器の保有について「私個人の理屈から言えば持てるだろう」と述べた。これに関連し、国是とされる非核三原則についても、「今は憲法だつて変えようという時代だから、国際情勢（の変化）や、国民が（核兵器を）持つべきかどうかということになれば、変わることもあるかもしれない」と述べ、将来、日本政府が政策を転換し、核兵器を保有することもあり得るとの見解を表明した。

この発言に対し、野党や韓国主要紙が、福田官房長官の更迭を求める強い反発を示したため、小泉首相は、すぐに「発言が独り歩きをしているが、真意ではない。『非核三原則』の変更や見直しを考えた時、今後の課題として検討していることは全くない」と述べ、現行の政府が「非核三原則」を堅持する方針に変わりはないという姿勢を強調した。次いで福田官房長官自身も、自らの発言を撤回するに至った。

劇画中の政治家の言葉と、実際の政治家の言葉とをこうして並べてみる時、核兵器の保持以前の弛緩（現実）と保持以後の緊張（劇画）との対照が見て取れる。

福田官房長官は、テレビカメラに向かって、「非核三原則」を国是とする我が国が核武装するなど、「とんでもない」ことだ、もし核武装すれば「大変なことになる」という言い方を交えて、自らの発言を否定した。「とんでもない」とはどういう事態を指すのか、「大変なことになる」とは具体的にどうなるのか。福田官房長官の言葉は、情緒的理解を求めているだけで、内実が示されていない。

福田発言の前後、政府や国会では不祥事が続いており、それらに比べれば、福田官房長官の問題発言は、所謂「政治家にありがちな失言」の一つとして軽微なものと受け止められたのか、すぐに影が薄くなった。マスメディアは専ら「疑惑の総合商社」鈴木宗男衆議院議員に関心を向け、その不正ぶりを熱心に報道し続けた。その報道さえも、やがてアジアで初めて開催された日韓ワールドカップの喧騒に打ち消されていった。

福田発言及びその後の報道には、かつて「核兵器」について語られる時、濃厚に立ち込めた重苦しさや緊張感がない。核を巡る政治家の失言、それに対する外圧、発言の撤回。これはもはやパターン化された反復運動であり、そこには「核兵器」が大量破壊をもたらした歴史的事実、それに伴う被爆者の癒しがたい痛みが消失しているのである。

広島・長崎への原爆投下から五十七年。被爆者は高齢化し、多くの人がこの世を去った。冷戦は終結し、危機感も希薄になった。核兵器は、廃絶するにせよ、容認するにせよ、拠って立つ論理が次第に曖昧で不確かなものになりつつある。

『沈黙の艦隊』の作者、かわぐちかいじは、フォトジャーナリスト恵谷治との対談『叫べ！「沈黙の国家」日本』（ビジネス社二〇〇二年二月二三日刊）の中で、この弛緩した状況について、次のように語っている。

この間、佐世保からアメリカ軍艦が出た時、やっぱり反対派のやつがいるんだけど、「おまえら、ほんとに止めようと

思ってるのかよ、おい」という感じだった。岸から垂れ幕を下ろして、ラウドスピーカーで反対、反対ってやって。あっ、出てった、じゃあ帰ろうって帰るわけだ。

それって、本気で止める気があるのだろうか。お祭り騒ぎみたいに、やらなきゃ立場上悪いじゃないか、示しもつかないし、ということをやっている。

昔だったら、あれ船出して止めるんだよ。とにかく軍艦の周りをワーツと小船で取り囲む。テレビだとか映像で見ると、ああ、これ本気だとわかるんだよ。何か止めたい理由があるんだなとわかるんだけど、それからどんどん反対運動がルーティンになった。今度は岸壁だけでワーワーやっておしまい。そういう儀式みたいなことでやったからいいやって感じになっている。どんどん真剣に論議しない方向になってきた。

（第三章 国家戦略なき日本）

勿論、この弛緩した時代状況こそ、平和と呼ばれるものだとする考え方もあるだろう。しかし、この「どんどん真剣に議論しない方向になってきた」状況の中であって、現在、国会では「有事法制度関連三法案」が審議されている。この法案には、有事の際、私有財産を凍結・接収することを可能にする取り決めも含まれるという。だが、「有事」とはいかなる事態を指すのか。ここでも、法案の根幹をなす最も重要な言葉の内実が見えない。

核ミサイルの飛来は「有事」としてどのように想定されているのか。現実の法案が提示する虚構性に対峙するだけの「原爆文学」の創出は、果たして可能だろうか。

1 「原爆文学」の正典と外典

第一回原爆文学研究会における研究発表(二〇〇二年三月三〇日、於九州大学)で、川口隆行氏が「原爆文学の問題領域」として指摘したとおり、今日「原爆文学」と呼ばれるジャンル(当然、日本固有の呼称である)は、正典として原民喜『夏の花』井伏鱒二『黒い雨』等を中心に据え、その周りを被爆者の体験に基づく作品群(あるいは被爆者の視点に立つ作品群)が囲繞することで構成されているように、領域化されている(と感ぜられる。川口氏の論は、この感覚が発生した経緯を明らかにしている)。

「平和教育実践事典」(広島平和教育研究所編・一九八一年・労働旬報社)は、教育現場におけるハンドブックとして優れた内容を持ち、実際に活用されているものと推察されるが、この中で「原爆文学」「原爆児童文学」として取り上げられているものは、基本的に、皆、核兵器がもたらした惨禍を被害者の側から描いたものばかりである。

だが、正統な「原爆文学」の「領域」は、被爆者の体験(視点あるいは語り)に依拠する以上、被爆者の高齢化あるいは死亡に伴って、もはや新たな物語を生む力を弱らせている。また、「原爆語り部」が修学旅行の中学生たちに飴玉を投げ付けられるという近年の事件(一九九七年長崎市NCCホール)が象徴しているように、長年にわたって反復され、形式化した語りは、次世代にとって「うざったい」ものでしかない。勿論、だからといって、「領域」内に封じられた「原爆文学」の失効を問題にするのは性急であろう。少なくとも核兵器がこの世に存在している限り、「原爆

文学」は、今後も読み継がれるべき人類史的な「価値」を有している。問題にすべきなのは、その正当な価値が見出されるべきコンテンツが、今、根こそぎ失われつつあるということであり、今後、その回復は可能か、という点にあると思われる。

「平和教育実践事典」には、「IV 核を頂点とする軍事状況」と題された章があり、世界の国々の、現時点での核開発、軍事力の状況が、防衛白書等の資料を用いて解説されている。この事典は、平和を希求する理念に満ち満ちているが、この一章だけは、全体の調和を壊し、読む者に暗い影を投げ掛けてしまうように思う。

この章には、マンハッタン計画から現代に至るまで、核兵器がいかに関与され、実験され、使用され、配備されてきたか、そして、現状はどのようなようになっていくか、ということが客観的に記述されている。この一章が設けられた背景には、現代における「平和」が、「戦争のない状態」といった物言いでは単純に定義できるものではなく、核兵器の廃絶と深く関わっていることを指摘して置こうという意図があったことは想像がつく。だが、読み進むうちに、他の章との関連で、様々な疑念がわき起こってくる。核兵器によるミリタリー・バランス上に成立している世界平和の現実と、日本でなされている平和教育との間に横たわる、あまりにも大きな懸隔を、どのように埋めてよいのか分からなくなるのである。

毎年、原爆記念日にヒロシマ・ナガサキから世界に向けてアピールされる平和宣言に意味があるのか、核実験の度に広島・長崎

両市長が国家元首に対して送る抗議電報に意味があるのか、そもそも「平和教育」に意味があるのか、みんな、ただの恒例行事ではないのか、現に世界中の平和運動を嘲笑うように今も核兵器は増え続け、高度な攻撃オプションを備え始めているではないか、日本は「非核三原則」を唱えながらアメリカの核の傘の下に庇護されているではないか：等々。ところが、当然のことながら、この事典が掲げる「原爆文学」は、これらの問い掛けとは無縁である。

「原爆文学」が、現代においてもなお有効な「文学」たり得るのであれば、「正典」とは似ても似つかぬ姿であつても、「核を頂点とする軍事状況」に向かつて作品化され続けているはずである。我々は、「正典」の呪縛ゆえに、それらの作品を「原爆文学」の亜種、あるいは「外典」と呼ぶべきものであると認知することができずにいるだけなのかも知れない。

SF映画、SF小説は、所謂、エンターテインメント（娯楽物）の範疇に括られ、「文学」として論じられることの少ないジャンルであるが、「被爆体験」から離れ、「核兵器」・「核戦争」というものを題材として、最も素早く作品化し始めた分野であつた。そもそも核兵器自体が、近代科学技術の産物であり、その存在を忠実に描けば科学小説になってしまうことは避けられない。また、核兵器がもたらす大量破壊・放射能被害は、人間の日常感覚を超えており、緻密で写實的な描写を重ねれば重ねるほど荒唐無稽な絵空事として受け取られかねない。そして何より、米ソによる核

競争、英仏中などへの核拡散は、近い未来に自分の頭上で炸裂するかもしれない原水爆を予感させるものになっていった。つまり、「核」を描こうとする時、個人の被爆体験と自意識を離れてしまえば、その表現は必然的にSF（サイエンス・フィクション）の性質を帯びる傾向があるのである。また、核兵器という、人類が創り出したものでありながら、その扱いを持って余している矛盾だらけの存在は、SF的要素に加えて、スラップスティック・ブラック・コメディを容易に招請してしまう。

核兵器・核戦争を扱ったSFの代表作（一九七〇年以前）を列挙する。

一九五四年 『ゴジラ』（東宝）

ゴジラは水爆実験によって

突然変異した爬虫類であり、口から放射能を吐き、都市に破壊をもたらす怪獣として創作された。これは、同年三月一日に起きた第五福竜丸事件の影を宿している。（ゴジラのキャラクターは、その後、世界的な人気を博し、一九九八年にハリウッド版が製作された。）

一九五五年 『生き物の記録』（東宝）黒澤明監督

核戦争に異常に怯える老人を三船敏郎が熱演。

一九五七年 『渚にて』ネヴィル・シュート

核戦争で人類が滅亡する小説。

(一九五九年映画化)

一九五九年 『レベルセブン』モルデイ・ロシュワルト

ミネソタ大教授が核戦争を警告するために書いた小説

(一九六二年 キューバ危機 ソ連による核実験最盛期)

一九六四年 『復活の日』小松左京 (一九八〇年映画化)

『地球0年』矢野徹

『博士の異常な愛情―私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか―』

スタンリー・キューブリック

一九六八年 『アフリカの爆弾』筒井康隆

一九六九年 『霊長類南へ』筒井康隆

井伏鱒二が「新潮」誌上に『姪の結婚』(後の『黒い雨』)の連載を開始するのは、一九六五年の一月であるが、それ以前に、SF作品や映画は、かなりの成果を上げていたことが分かる。だが、これらの作品群が既に無視できないポリウムを占めていながら、これまで「平和教育実践事典」のような書籍に「原爆文学」として記載されることはなかった。しかし、「正典」化された「原爆文学」では不可能な表現をこれらの作品群は達成している。その面での評価はまだ得られていない。

原爆文学における「正典」に対して、これらの作品がどのよう

に位置づけられる可能性を持つのか。考察を試みたい。

判り易く図式化するために、スタンリー・キューブリックの『博士の異常な愛情―私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか―』(一九六四年)と、今村昌平の『黒い雨』(一九八九年)の二本の映画を、「原爆文学」における一対の対照例として取り上げる。

まず、『博士の異常な愛情』とは、どういう映画だったのか、簡単に振り返っておく。

アメリカ戦略空軍基地所属のジャック・リッパ―将軍は、共産主義恐怖症から発狂し、突如として核を搭載した34機の戦略爆撃機に「R作戦」を命じてしまう。このR作戦は、報復に限り核攻撃の権限を大統領から委託されている軍関係者が発動するもので、ソビエト連邦領内の軍事拠点を核攻撃するものだった。そして、一旦命令が下れば、特殊な暗号以外には攻撃を中止できない。緊急事態を受けて、メアキン・マフリー米国大統領は空軍のバツクター・ジッドソン将軍、旧ナチ黨員と思しき科学者のストレンジラブ(異常愛)博士ら、関係者を招集し、対応を検討する。しかし、彼らは、会合の場で、自らの保身を画策したり、下らない外交辞令に時を費やして、深刻な事態に誰もまともな対応をしようとしめない。戦略爆撃機はその間にもソビエト領内に深く侵攻してしまふ。それでも、何とか作戦解除の暗号は発信されるのだが、マシントラブルで受信が間に合わなかった一機の機長が、ロデオ・スタイルで水素爆弾に跨り、爆弾もろとも落下してしまふ。これがきっかけとなり、米ソの核ミサイルが相互に大量発射され、

世界中で水爆が炸裂し、無数のキノコ雲が立ち上る。

核実験の実写映像を用いたキノコ雲が、これでもかと次から次へ巨大な傘を広げるラストシーンにヴェラ・リンの甘い歌声がかぶさる。人類滅亡の場面に、お気楽で無責任な歌が何故か似合ってしまう。

『また逢いましょう』

また、会いましょう、どこか、いつかは分らないけれどでも、いつかまた、晴れた日にきつと会える

いつものように、笑顔を絶やさないで

青空が暗い雲を吹き飛ばしてくれるまで知ってる人に会ったら、よろしく言っ

きつと、もうじき会えると伝えて

私がこの歌を歌っていたと言え

きつと、みんな喜ぶでしょう

また、会いましょう、どこか、いつかは分らないけれどでも、いつかまた、晴れた日にきつと会える

『博士の異常な愛情』は、『ピンク・パンサー』シリーズのクルーゾー警部役で知られるコメディアン、ピーター・セラーズが一人三役を演じており、随所に笑いが散りばめてあるため、一見、他愛ないブラック・コメディーに見えてしまう。しかし、大量・大規模核兵器を保有する米ソの対立構図や、核を扱う軍事的指揮系統、政治家・軍人・科学者の思惑など、背景としているものが全てリアルなものであることに気づく時、笑いは凍りつく。エンディングに映し出される無数のキノコ雲は、核実験の実写ファイル

ムからの転用であり、これも異様な迫力を持っている。一九六二年のキューバ危機等、「核」を巡る緊張が顕在化していた時代には、優れた批評性を発揮した作品だったと思われる。

これに対し、一九八九年（平成元年）に発表された今村昌平の『黒い雨』は、井伏鱒二の小説の忠実な映像化であり、田中好子らの好演に見るべきものはあるものの、カンヌ等、国外の映画祭では、不評であったという。発表当時、外国映画祭での不評は、原子力産業と密接に関わるアメリカ映画業界（いずれもユダヤ系資本）が、「被爆者もの」を煙たがったことに原因があるという、妙に穿った見方も提示されて興味深かった。それはともかく、一九八九年に、敢えてモノクロで映像化し、一九四五年八月六日以後を再現したこの作品を、一九六四年のモノクロ映画『博士の異常な愛情』と比較する時、どうしても時宜を得た批評性という点では劣ることに気づかざるを得ない。一九八九年に映画化されたこと自体が唐突の感を免れないからである。原作の『黒い雨』が日本で名作の誉れが高く、「原爆文学」の正典的な位置を与えられているといっても、それゆえに世界でも常に有効な表現であるに限らないのは当然であろう。

しかし、この二作品を、二〇〇二年の現在、製作・発表時の時代的文脈から離れて見比べる時、相補的な関係を生じていることに気付かされる。

『博士の異常な愛情』は、見ようによっては核兵器を玩具にし

たドタバタ喜劇である。しかし、『黒い雨』をもたらした原爆が、『博士の異常な愛情』に描かれたような愚かしい経緯で投下される可能性を持つている以上、これを単純なスラップスティック・コメディとばかり見るわけにはいかなくなる。また、一方で、『博士の異常な愛情』のラストシーンで次々と炸裂する水爆の下には、『黒い雨』の惨禍よりも更に無残な地獄絵図が繰り広げられていることを想像するからこそ、『博士の異常な愛情』という映画に込められた風刺性・批評性は、一層強烈なものになる。二作品は、互いに補完し合うことで、表現としての存在意義を高める関係を生じさせているのである。

『博士の異常な愛情』は、発表された一九六四年当時には、原爆惨禍の記憶がまだ風化していなかったため、『黒い雨』を必要とせずとも、強烈なブラック・ジョークたり得た。一九六五年の小説『黒い雨』は、キューバ危機や、エスカレートする米ソ核実験を背後に負っていたからこそ、『博士の異常な愛情』を見ずとも、原爆投下が過去の事実というだけではなく、明日の危機として読まれ得た。だが、今、『原爆文学』の正典『黒い雨』には、それを「凶」として浮かび上がらせるべき「地」が欠如している。また、サブカルチャーに括られる領域に生じた、『原爆文学』の外典ともいべき作品群も、核戦争の現実を裏付ける正典なしには、批評性を獲得し得ない。

「原爆文学」を狭い領域へ囲い込むことは、ただでさえ「日本語」という外部を持たない言語環境においては、表現を貧相なものにやせ細らしてしまう危険がある。領域の外部に生まれる優れた表現は、囲い込まれた「原爆文学」をも賦活し、本来の姿を取

り戻させる可能性を持つているように感じられる。これは「原爆文学」にとって、SF小説・映画等の娯楽作品群が、「外部」であったからこそ持ちえた価値であろう。

2 『沈黙の艦隊』が開示したもの

映画『黒い雨』が公開された一九八九年、講談社の青年向けマンガ雑誌「コミック・モーニング」に、かわぐちかいじの『沈黙の艦隊』が連載されていた。この時点では、核兵器を搭載した原潜を奪い取った自衛官・海江田四郎が、米ソを相手に華々しい戦闘を繰り広げていた時期に相当し、この作品が、やがて「反核・平和」を主要なテーマとして抱え込んだものであることに、ほとんどの読者が気づいていなかった。

二〇〇二年の春、本稿作成のために『沈黙の艦隊』全巻を再読した時、この作品が、背景に「反核」の思想を負っていることを再確認するとともに、国産原子力潜水艦「やまと」の航海が、佐世保に始まりニューヨークに終わっていることを、佐世保に住む私は何とも象徴的に感じざるを得なかった。

佐世保は、一九六四年に、日本で初めて米原潜（シードラゴン）が寄港した港であった。また、一九六八年には原子力空母エンタープライズの入港を巡って、全国から集結した反対派と警官隊とが激しく衝突するという、流血事件の舞台になった街でもある。そして、長期の「漂流」の後、廃船となった日本初の原子力船「む

つ」の母港であったことも、忘れてはならないだろう。

私は、現在、長崎県立大学に週に一回非常勤で出講しているが、自分が勤務する学校からそこに行くためには、インド洋出撃（米軍のアフガニスタン攻撃支援）から帰国した海上自衛艦隊を眺めつつ、米軍基地のメインゲート前を通過し、今、国からの補助金・援助金不正流用問題に揺れるSSK（佐世保重工業）の造船所施設を左手に見ながら、北に車を走らせなければならない。

二〇〇一・九・一一アメリカ中枢同時テロ以後、米軍基地には、最高警戒態勢を示すレベルD（デルタ）のプレートが掲げられ、戦闘用迷彩服を着用し抜き身のライフルを構えた米兵数名が常時ゲート前に立っている。その又前には、どういいうわけか日本国警察が、ヘルメットに盾と長警棒といった装備でこれも数名立っている。この物々しさを横目に見ながら基地前を過ぎると、道はSSK立神岸壁に沿って走ることになる。眼前に、『沈黙の艦隊』VOYAGE 4「原潜『やまと』」に描かれた「佐世保河島重工造船所」の風景が現実のものとして広がる。

（※『沈黙の艦隊』に用いられた「絵」は、実際の写真から起こしたものが多し。それがこの劇画のリアリティーを一面で支えている。しかし、原潜等の絵については、艦船関係の写真集から、不用意な「盗用」をしたため、作者および講談社は連載開始早々に写真家の抗議を受け、謝罪・全面賠償している。）

この佐世保の風景から始まる「やまと」の航海は、ニューヨークで終わる。作品中、幾度となく登場するマンハッタン島の絵には、今はなき「世界貿易センタービル」のツイン・タワーが、富

めるアメリカ、強きアメリカの象徴の如く誇らしげに屹立している。私は、読み進む中で、今では「グランド・ゼロ（爆心地）」と呼ばれているビルの絵を目にする度に、一瞬目を止めざるを得なかった。

劇画という新しい表現形式は、まず何よりも「分かり易さ」が身上であり、今まで蓄積されてきた表現を、「文学」「演劇」「絵画」「映画」「写真」といったジャンルを問わず（貪欲に無節操に取り込むことで生命を得ている。そして、「劇画」は、やはり何よりも先行する「漫画・劇画」を主な資源として生産されており、『沈黙の艦隊』とても例外ではない。）

潜水艦長の謎めいた性格は、ジュール・ベルヌの古典的SF『海底二万里』のネモ船長以来、定番であるし、潜水艦漫画の嚆矢ともいふべき、小澤さとる『サブマリン707』（一九六三年）『青の6号』（二九六七年）には、特定の国家に所属しない潜水艦部隊が世界の平和的統一を目指すという物語が既に描かれている。戦闘シーンにおいても、ちばてつやの『紫電改のタカ』（一九六三年）等、先行する戦争漫画に多くを負っている。「やまと」という戦艦を中心に据えた漫画としては、松本零士の『宇宙戦艦ヤマト』がある。『宇宙戦艦ヤマト』は、放射能汚染に苦しむ地球を救う物語であり、「核戦争」が低音となつていく。また、国産の「黒船」でニューヨークに乗り込むというストーリーも、ペリーの黒船来航以来のアメリカ・コンプレックスを逆手に取った漫画、諸星大二郎の『マンハッタンの黒船』（一九七九年三月・集英社刊）『徐

福伝説』所収)が既に存在している。

そして、最も決定的な影響を受けていると思われるのが、多くの方が指摘するように、トム・克蘭シーの小説、『レッドオクトーバーを追え』(一九八四年・邦訳一九八五年・映画化一九九〇年)であろう。米ソ冷戦、最新型原潜、乗っ取り、逃亡、核兵器、潜水艦同士の海中戦闘、カリスマ的艦長等々、『沈黙の艦隊』を構成する重要な要素が、ほとんど含まれている。(克蘭シーは、日航ジャンボ機によるアメリカ国会議事堂自爆攻撃を描いた『合衆国崩壊』で知られる作家である。この小説はニューヨーク同時多発テロを予見したものとして有名になった。)

これら先行作品との影響関係の考察は、詳しく見ていけば多少は興味深いものが出てくるのかもしれないが、ここでは触れない。オリジナリテイーよりも分かり易い娯楽性を身上とする劇画表現は、先行作品から得ているものを小賢しく隠すようなことはせず、露わに晒しておく事で読者に目配せし、共犯関係に近い交流を図ってくる以上、影響関係の考察は大した意味があるとも思えないからである。

さて、分かり易さを身上とする『沈黙の艦隊』は、白土三平の忍者物よろしく、隠密行動に出発する海江田四郎以下のサブマリナーたちが、「死んだことにされる」ところから始まる。

日本が資金・技術の全てを負担・提供して佐世保で密かに建造された最新型原子力潜水艦という設定は、「むつ」の廃船という歴史的事実を知りながらも、「そういうことが秘密裡に進行して

いてもおかしくない」といった、妙なリアリティーを持つて迫ってくる。その潜水艦が、自衛隊ではなく、米軍第七艦隊所属にされているという設定も、憲法九条と非核三原則、日米安保といったものを勘案すると、妥当なもののように見えてしまう。

このリアルさは、「軍事」というものを、自分たちには無関係なものとして教育されてきた戦後日本人の無知に生じる幻影であろうが、読者は思わず釣り込まれ、「馬鹿な」と一笑に付す余裕を与えられない。

分かり易さは、登場人物や艦艇のネーミングにも反映されている。主人公の名前「海江田四郎」は、見ての通り「海軍」「江田島」「天草四郎」の複合体として読める。「江田島」(旧・海軍兵学校、現・海上自衛隊幹部候補生学校)に学んだ若きエリート自衛官が「海軍」(海上自衛隊・第七艦隊)の「天草四郎(反乱指導者)」となり、最後には滅びるといふ運命が、この名前の中に既にセツトされている。原潜の名前も、コードネーム「シーバット(海の蝙蝠)」であり、鳥とも獣ともつかぬ運命を生きるイソップ寓話のキャラクターが反映されている。これは日米の両国から独立を果たし、どの国家権力にも属さぬ軍事国家となる「やまと」の前身として、相応しい名前である。そして、平仮名表記の「やまと」。勿論、「大和」とは、太平洋戦争末期、片道分の燃料で沖繩特攻に出撃し、米軍の攻撃で船首の「菊の御紋」とともに轟沈した、あの巨大戦艦の名前である。原潜が「やまと」と名付けられた瞬間から、読者は、この航海がニューヨークまでの片道の特攻であることを察知する。「やまと」が、最後には敵の攻撃で沈む船で

あることも予感する。実際に、その通りにストーリーは展開してゆく。だが、我々には、一つの問い掛けが残される。「日本武尊Ⅱやまとたけるのみこと」の訓読みでも分かるように、「日本」が「やまと」と読まれ得ることを我々は知っている。その「日本（やまと）」が「日本」から「国家」として「独立」する、とはどういうことか。この表現に、読者は絡めとられ、今までに味わったことのない「ノベル」を感じるのである。『沈黙の艦隊』の「ノベル」としての成功は、「やまと」というネーミングに負うところが大きい。意図された分かり易さが、それゆえに思わぬ問題を生じさせている。

「日本」から「やまと」を切り離れたこの物語は、「やまと」をして、戦後「日本」が成し遂げられなかった二つのことを実行させる。一つは劇画の重要な構成要素でもある「戦争」、そして、もう一つは「外交」である。この二つの領域は、戦後日本が、今もって回復できていないとされる国家機能だが、「やまと」は、核兵器保持の可能性をちらつかせるだけで、一隻の原潜でありながら、「国家」として振舞い始める。

劇画の売りである戦闘場面は、日本人が操縦する一隻の原潜が、米艦隊やソ連原潜を翻弄、撃破するという内容であるため、先の大戦でアメリカに大敗し、その後北の脅威におびえ続けた日本人の溜飲を下げるように描かれる。また、小なるものが、知略と技でもって大なるものを倒す構図は、日本人好みの「弁慶と牛若丸」の類型を踏襲している。周到的取材に基づいているのであろう、ディテールもきっちりと描き込まれており、画力もあるため、戦

闘場面は非常に面白く読める。だが、これまでの戦争劇画と決定的に違うのは、「日本人」が、現代の文脈の中で、「核兵器」を持ち、使用するかもしれないということを前提とした戦闘が描かれていることにある。

だが、それ以上に刺激的なのが、「外交」である。核保有の疑惑がある原潜が、独立国家、それも戦闘国家を標榜し、アメリカに向かう時、どのような「言葉」が発生するのか。日米外交上の「建前」が剥ぎ取られ、「本音」が剥き出しになる瞬間は刺激的である。読者が、日米政府の首脳や軍人から聞き出したいと思っている「言葉」が、挑発的な言い回しで溢れ返る。勿論、読者の多くは「本音」と「建前」の使い分けに習熟した日本人である以上、ここで暴露される本音など、とつくの昔に知っている。しかし、その言葉が、政治家や軍人の口から直接出てくるのを劇画中で目の当りにする時、日頃は奇麗事を並べて誤魔化しているが、やはり真実はこうなのだとなんて納得させられてしまうものがある。

「(核魚雷を) 射てるものなら射ってみろ海江田!! そうなれば第2のパールハーバーだ!! 日本がステイツの核の傘から外れて無条約の海に漂流するのだ!!」

空母カールビンソン艦長の言葉 (VOYAGE 14 「カールビンソン」 停止せよ)

「日本は合衆国の丁稚か!」 曾根崎防衛庁長官の言葉 (VOYAGE 16 「完全なる独立」)

「過去対米関係がギクシヤクした時は、アメリカの傘の下にいる日本がいつも頭を下げてきた。『シーバット』はわれわれに先んじて自立を表明した新しいもうひとつの日本なんです。」外務次官・天津航一郎の言葉

(VOYAGE 38 「もうひとつの日本」)

「よって米政府米海軍には日米安全保障条約に基づいて、不当に攻撃を続けるソ連海軍に対し同盟国として攻撃を要求する。そもそも安全保障条約とは何なんだ？適性国家から同盟国が攻撃されたとき、その同盟国の安全を保障するために発動する条約の筈だ。違うか!? 同盟国・日本がソ連艦隊の脅威にさらされている今、何故米軍はソ連軍に対し攻撃しないのか!? 承知だと思うが西独やフィリピンと違い、わが日本国民は在日米軍に対し思いやり予算を含めて年間3279億円を支払っている。我々国民の血税をだ。その日本を守らない条約とは一体何なのか!？」

国会議員・海原渉の言葉 (VOYAGE 49 「日米会談決裂」)

「たとえ専守防衛でもギリギリまで撃つてはいかん!!」

「先制攻撃をやらなくて勝てるとお思いですか。殺られるだけですよ。」

「そこを勝つのが日本の自衛隊ではないか。われわれの任務は1分でも長くもちこたえて犠牲を最小限に食い止め、時間を稼ぐことだ。」

自衛艦「くらま」艦長と部下の会話

(VOYAGE 52 「米大統領ニコラス・J・ベネット」)

「あの敗戦の時、日本は本土で決戦をやらなかった。敗戦国として踏みじられることもなかった。おかげで我々は生き延びてるわけだ。だが、あの日から日本は死を恐れ、生き延びるために正義を捨てた国になってしまった。」

国会議員・海原渉の言葉 (VOYAGE 54 「海原渉の戦略」)

『沈黙の艦隊』は、これらの言葉を、臆面もなく大真面目に書き込んだ最初の劇画として読者を圧倒し始める。そして、日米首脳がハワイのパールハーバーで「やまと」問題を話し合う場面では、戦闘以上にスリリングな「外交」の場面が描かれる。(「緒言」引用参照)

日本とアメリカが本音をぶつけ合い、カタストロフに至ればこのようなことになるのかもしれないという想像を形にしたこの部分は、(それだけでも十分興味深いものがあるが)「核兵器」が今なお効果的な外交の道具たり得ることを指摘しており、虚を突かれる思いがする。被爆体験ゆえに、「核兵器」を「絶対悪」視することに馴らされてきた日本人にとって、使用されうる一つの道具としてクールに提示される「核兵器」の在り方は、新鮮ですらある。これは「原爆文学」の正典として読み継がれてきた作品群には欠落している「外部」の視点である。

二〇〇一年七月一七日に、日本世論調査会が、原爆投下の是非や、米国の核の傘についての意識調査結果を発表した。発表され

た数値は、「日本の安全保障上、米国の核兵器抑止力に頼るべき」が、三七・三%。「原爆投下は戦争終結上やむを得なかった」が、三四・九%であった。この数値を信頼するとすれば、「平和主義」「非核三原則」という国是と、国民の「核兵器」に対する意識の間に「ずれ」が生じていることになる。この「ずれ」は、「非核三原則」の見直し、あるいは、反対に「反核平和教育」の徹底で、解消すべき性質のものであろうか。いや、そうではあるまい。世界唯一の被爆国でありながら、自国防衛を原爆投下の当事者であるアメリカ「核の傘」に依存するしかない国家の成り立ちが、核に対する意識をダブル・スタンダードに追い込んでいるのである。この「ずれ」を抱え込んだまま生きている日本人を正面から扱った「原爆文学」は、これまで書かれていなかった。『沈黙の艦隊』は、その空隙を突いた作品となった。

3 『沈黙の艦隊』の反核思想

ベストセラー（「累計二五〇〇万部」と書かれていることが多い）となり、一時期、大きな話題をさらった劇画『沈黙の艦隊』であるが、この作品は、発表当時からある種の読み辛さを伴っていた。僅か二ヶ月間の事件を描いたストーリーが、七年半の歳月（一九八八年・四四号〜一九九六年・一三三号 計三五四回）にわたって週刊劇画誌（講談社「コミック・モーニング」）に連載されるといふこと自体に無理があったのである。

この七年半は、世界的といってもよい激動期に重なっている。国外では、ソビエト連邦が崩壊し、東西ドイツは統一し、東欧の

社会主義諸国は消滅し、イラクのクウェート侵攻から湾岸戦争が勃発した。国内では、「昭和」が終焉し、「平成」が始まった。阪神淡路大震災、オウム真理教による地下鉄サリン事件が起きた。また、バブル経済が崩壊し、底無しの不況「失われた十年」が始まったのもこの時期である。『沈黙の艦隊』は、東西冷戦下における大規模・大量核兵器の対峙と、経済大国となった日本に如何なる国際的貢献が可能か、ということ的前提としたストーリーであったため、連載途中に起きたソ連邦崩壊と平成不況は、物語の成立基盤を危ういものにした。また、湾岸戦争に投入されたハイテク兵器の数々は、劇画中の戦闘を古臭いものにしてしまった。物語の展開も、謎めいた潜水艦長・海江田四郎の指揮下、新鋭潜水艦「やまと」が神懸かった海中戦闘シーンを繰り広げる前半に比べ、海江田の政治的意図が次第に明らかになり、「現代世界において核兵器廃絶は可能か」「人類は戦争を止められるか」というアポリアに立ち向かい、難解の度を増していく後半は、劇画にエンターテインメントを期待する読者を当惑させた。

「核兵器」を巡って日本人の中に形成されるダブル・スタンダードを解消する方途として、自国防衛のために「核」を容認し、実際に核武装してしまおうという考え方があつた。日本は、アメリカの傘の下から離れ、「一人前の国」となつて、安保理常任理事国入りを目指すべきと考える保守系論客にとつて、「日本核武装論」は、魅力的なものであるようだ。（例えば、清水幾多郎の『日本よ国家たれー核の選択ー』一九八〇年・文藝春秋などが想起されよう。）

『沈黙の艦隊』も、一見、その考え方に沿って物語が進むかに見える。核兵器を搭載した原潜が「やまと」と名乗って独立国家を宣言する。日本は、その「やまと」と安全保障条約を結ぶことで、核による抑止力を提供してもらい、アメリカから軍事的独立を果たす。「やまと」は独立国だが、日本（やまと！）民族による核武装という点においては、「日本核武装論」と同工異曲に見える。

しかし、主人公・海江田の目的は、そこにはない。驚くべきことに、海江田は、核兵器が廃絶された、戦争のない絶対的平和世界の実現を目的としているのである。分かり易さを身上とする劇画であり、実際、明快な論理でストーリーを展開していく『沈黙の艦隊』であるが、海江田の思想は決して分かり易いものではない。後半、海江田の思想は、世界に配信されるTV中継や国連の場で開陳され、米大統領ベネットまでもが、その影響を受けていく。前半の「即物的」戦闘の世界と、後半に繰り広げられる「理想論」の世界とは、明らかに齟齬を来たしており、海江田が自らの思想を開陳する序曲として、前半の戦闘を踏まえていることについては、もはや無理が感じられないではない。しかし、核を巡る海江田の言葉は、これまで劇画では語られることのなかった性質のものであり、破綻を恐れない極論であるが故に、読者の思考との間に適度の距離が生じ、その距離感が「核兵器」と「平和」を巡る思考を読者に促してくる。

海江田が自らの思想を開陳した言葉の一部を並べてみる。

「そう、核なんか無用の兵器。保有しているどの国も射てやしない。ただ、核が最も効果を発揮するのは、威嚇においてのみです！」(VOYAGE 14 『カールビンソン』停止せよ)

「核保有国が互いに牽制し合っている状態が戦争を抑止した平和状態だと言ったのは、あなたの合衆国ではなかったか。こうして自らも確実に滅ぼす核を装填して射てもせず、にらみあっている。この状況、今の世界状況にそっくりだと思いにならないか」(VOYAGE 16 「完全な独立」)

「われわれは西側にも東側にも与するつもりはない。わが国が闘う相手は、人間と国家の尊厳を踏みにじろうとする全ての敵だ。本艦の理想は、あらゆる人間・民族の完全なる自立！そして、堂々たる尊厳の獲得である。」

(VOYAGE 37 「母国のために」)

「金を稼ぐための政治力しか持たぬ日本は、ひとたまりもなく叩き潰され沈む!!彼らが安穏と国家が存続すると思いつている連中なら、沈めた方が良い!!もし、彼らが人類の歴史に名をとどめる真に力のある国家と民族なら、このオイルと火の海から独立と尊厳を勝ち取るために何をすべきか探るはずだ!牢獄の庭を歩く自由より、嵐の海だがどこまでも泳げる自由を私なら選ぶ!!」(VOYAGE 47 「沖縄沖海戦II」)

「ストリンガー艦長、あなたは原潜で深海を航行している時、

陸の上の国家に所属していることを忘れることはないか？原子力により無限の命を与えられ、全く孤独に行動し続ける船、原潜は国旗も軍旗も掲げることなく誰のものでもない海の中にいる。そして搭乗員は全員が同じ目的のため運命を共にし、機能で結ばれている。まるで国家のように。原潜は人類史において重大な意味を持つと考えたことはないか？ストーリーガン艦長。(中略) まず私は、人類史から戦争を根絶することはいかなる方法によっても不可能だと考えている。核戦争の抑止は、私のテーマの一つだ。なぜ原潜なら核戦争を抑止することが可能なのか？」

(核保有国が核を実際に使用しないのは核の報復を恐れるからだ。つまり先制攻撃を行うには前提として敵国陣営の全核施設を破壊することが必要だ。だが、深海にある核を搭載した原潜のみは破壊しつくすことは不可能だ。これが原潜について語られる核抑止力だ!! / ストリンガーの返答)

私のやるべき仕事はただ一つ。ザ・サイレント・セキュリティ・サービス・フロム・ザ・シー!! (海からの沈黙の安全保障) 海からの全世界的な核戦争抑止力である! あなたが語った原子力潜水艦の核戦争抑止力とは実は一部の限られた国家だけのものだ。(中略) 核はやがて世界に拡散する。ならば世界的な核戦争抑止力が必要なのではないか!? 原潜が世界的な核戦争抑止力たるには、世界のどの国家からも独立した存在でなくてはならぬ!! それは必然的にあるひとつのシステ

ムとして具体化されるべきなのだ。即ち核弾頭ミサイルを持つ戦略原潜と護衛・通信用の攻撃型原潜で構成される超国家原潜艦隊(サイレントサービス)である。」

(貴艦は危険すぎる。そう判断せざるをえない! 核を持つから危険なのではない。超国家原潜艦隊なるものが核を持つことが危険なのだ! 誰の手も届かぬ深海に『神』を誕生させることになるからだ。それは人間がなすべきことではないのだ。 / ストリンガーの反論)

自らの思想をTV中継とコンピュータ・ネットワークによって全世界に発信した海江田は、SSSS(ザ・サイレント・セキュリティ・サービス・フロム・ザ・シー)海からの沈黙の安全保障)を実現すべく、国連総会出席を目指す。マスメディアによって、「やまと」事件を知った世界中の民衆は、海江田に共感を示し始める。ついには、アメリカ大統領と国連事務総長も、SSSSの実現に向けて動き出す。しかし、「政軍分離」を進め、大規模な軍縮、核廃絶を実行することは、アメリカ大統領にとって、巨大な権力機構である「軍産複合体」との戦いを意味する。『沈黙の艦隊』の最終部分の主人公は、アメリカの国家としての面子を立てながらも海江田の思想を具現化しようと苦闘する米国大統領、ニコラス・J・ベネットである。劇画『沈黙の艦隊』は、アメリカ大統領に、アメリカ議会で次のような演説をさせてしまう。

「ご存じのように現在の世界では戦争それ自体は犯罪ではな

い！この戦争における犠牲に対して私はずっと深い悲しみを抱きそして考え続けてきた。その私が私自身に問うたことを諸君にもお聞きする。戦争はなぜ犯罪ではないのか!? 例外的な国家（日本！）を除き、アメリカを含めあらゆる国家の憲法には、戦争を肯定する条項が定められている。かつて現在では犯罪とされている行為が国家単位で公然と行われていた。奴隷売買がそうであり、麻薬売買がそうである。そして、戦争が犯罪ではない現代においては『兵器売買』が国家産業として認められているのだ！麻薬売買をそして奴隷売買をわれわれは現在は野蛮な行為と認識し、断罪している。そして一方で生命を奪い、破壊をもたらすものである兵器の売買をわれわれは合法としている。現代を野蛮な『兵器売買の時代』として振り返る時がいつか来るのではないだろうか！」（フン！アメリカの国民総生産は約6860億ドル、そのうち第3世界諸国への兵器売却合意額はなんと3.5%、239億ドルだ！きさまの手も汚れきっておるではないか！ベネツト！／仏大統領の独白）

（アメリカの兵器は同盟国の安全保障のために輸出されているのです。あなたはアメリカの平和への歴史を否定されるのか？／デイン上院議員の反論）

「その言葉のむなしさをもう認める時期にきているのではないだろうか。兵器による秩序破壊が有効な時代はもはや終わろうとしているのだ。「やまと」との戦争で明らかになったことがある。「やまと」は同盟国・日本の共同開発によって

アメリカの技術で開発された兵器だ。即ち同盟国を含めあらゆる国への兵器輸出がわが国への攻撃に使用される可能性がある」とわかった。アメリカ合衆国憲法第3条第3節の1『合衆国に対し、戦争を行い、敵に援助を与え、便宜を図って加担する行為は、国家反逆罪を構成する』と明記されている。つまり他国へ兵器を輸出することは、合衆国憲法に違反するのではないだろうか！無論、全ての責任は黙過してきた大統領である私にあり、私の責任は重いといわざるをえない。」

（では、大統領、わが国は一切兵器輸出をやめるべきだと!?／デイン上院議員）「輸出だけではない。『兵器を輸出せず』『兵器を輸入せず』そして『兵器売買を仲介せず』この3原則をわがアメリカが世界に先駆けて宣言しようではないか！」（これを全面禁止することはわが国の経済に致命的な打撃を与えます！）

「われわれは兵器が戦争を生むものであることを知っている！その兵器で利を得ることを自戒する健全な精神も持っている！貧困が戦争を生む第3世界に対しては兵器の代わりに産業を輸出しようではないか！第3世界の発展は必ずわが国に巨大な生産需要をもたらす！諸君！われわれはもう、戦争が犯罪である時代に向かわねばならないのだ。そして戦争は勝者が裁くものではない。法が裁くべきなのだ。世界共通の法、即ち『世界憲法』だ。今、われわれの目の前に見たこともない未開拓地が広がっている。唯一の行政、唯一の議会、唯一の司法で成立する『世界政府』という地平だ！理想実現

のために建国されたわが合衆国こそふさわしいその地へ、われわれが最初に旗を立てるのだ！世界政府こそわれわれの巨大なフロンティアなのだ!!」(VOYAGE 316「大統領演説」)

こうして、スピーチバルンの中から抜書きした言葉のみを列記してみると、ここまでの理想論を書き込むことは、劇画というメディアだからこそ可能だったことが分かる。言葉のみでは、空々しく、読みづらい。それにしても、アメリカ大統領が語る「世界政府」構想は、今読み返すと、妙にリアルである。グローバル・スタンダードと名を変えて、世界を覆い始めているものを連想させる。

『沈黙の艦隊』のストーリーがどのように締めくくられるのか、簡単にまとめておく。

海江田四郎を特別ゲストとして迎え、「沈黙の艦隊」認否を決議する国連総会が開催される。その時、艦長不在の「やまと」が1発のミサイルによって撃沈されてしまう。しかし、海江田は国連総会の壇上に登り、「SSSS」によって戦争なき未来が必ず来ることを全人類に向けて呼びかける。米大統領も、海江田の協力要請に応じて登壇するが、二人が初めて言葉を交わした瞬間、恐らくは軍産複合体から送り込まれたと思われるスナイパーによって海江田は狙撃される。脳死状態で眠る海江田の心音と、暗殺を予感し、手紙として残していた海江田最後のメッセージ「独立せよ」が、世界中にTV放送される。それを受け、海江田と共に生きることを求めて、「世界市民」が動き出す。(ラストは、未亡人として

残された海江田の妻と、遺児の生活の様子が描かれる。)

海江田の国連演説を記す。

「個人とか市民とか国家という名ではなく、『人類』という名においてのみ歴史はとぎれなく存在し、我々は『人類』という名においてのみ、未来を語る事ができるのです。(世界の地域名を冠した『人々』を日付変更線から西回りで呼びかける)人類という名においてのみ『われわれ』という言葉は存在します！私は海江田四郎です。人類は新たな独立の時を迎えています。そして私の行動、すなわち『やまと』の航海は人類の独立戦争に加担するものです。人類が国家という所属で生きた旧時代に別れを告げ、人類は国家から独立すべく出現したのが『沈黙の艦隊』なのです。自らがまず、独立国家『やまと』を名のり、国家として存続する力を示したのちに、国家以上の存在に仕える組織、『沈黙の艦隊』を実現しました。それがなぜ可能であったか！それは我々の行動が人類の記憶とともにあるからです。人類は時代が行き詰まり変化しようとする時、そのつど普遍的な記憶を呼び覚めますのです。かつて地球上に王権による支配がまた列強の植民地がはびこっていた時、次の時代に向けてコモンセンスというべき考え方が生まれました。現在、世界最強の国家アメリカ合衆国が独立しようとした時代にも、独立戦争を根底で支えた考えです。私が従っているのは、来るべき新しい時代のコモンセンスです。人間はひとりひとり自由であるべきですが、自らの自由を守る権利を国家の保護のもとに行使すれば、かならず国家間の戦争を生みます。ひとりひ

とりの自由追求を許しながら国家間の戦争を生まない考え方こそ、来るべき時代のコモンセンスです。私は、国家に勝利し続けている。それゆえ独立戦争なのです。国家は国家以上の存在に仕える者を圧殺できない。有史以来、人類が手に入れた最も偉大な資産は民主主義です。そして民主主義の核となる多数の意思は、有史以来、変わることなくすでに確定しています！戦争について

60億の人々に直接聞いてみるならば、その回答は誰もが想像でき実感できるものでしょう。われわれ人類の大多数は、有史以来戦争に反対しているのです。私は信じています。今や60億に至るまで繁栄してきた人類の意思を！人類は戦争による絶滅を受け入れる生物ではない。民主主義は太古から人類が到達すべき必然であり、一方、それを実現するための民主制度は未熟である。このことをわれわれはコモンセンスとして認識すべきです！すなわち我々は国家を超えた民主主義の時代へと向かわねばならないのです。国家とは本来、民主主義によって成立したシステムではなく、そしてあなた方も国家政府の指名により、ここにいるにすぎません。もちろん、『沈黙の艦隊』も、民主主義によって正式に認められたものではありません。『沈黙の艦隊』には、人類に対する憎しみはありません。あるのは行為に対する憎しみだけです。大量殺戮兵器を使用した国は。国家以外の存在から報復されるのです。再報復しようにもする価値さえない存在、それが『沈黙の艦隊』です。非常時においては戦争そのものを敵とし、平時にあつては人類多数の勝利を見守るだけの存在、それが『沈黙の艦隊』です。この場での『沈黙の艦隊』の決議こそが、核兵器廃絶への人類の意思表示であり、そして、われわれは遠くない未来、核兵

器を廃絶し、戦争を根絶するのです。(中略)ベネット大統領。私に原潜を1隻頂きたい。軍事力を有する国家は、一定の割合で国家以上の組織に兵力を抛出しなければならない。これもまた『沈黙の艦隊』の考え方です。自らが作り出した軍事力を自らが抑止するためです。制度が追いつく前に、人類は致命的な打撃を受けてはならないのです。」

(VOYAGE 335「海江田登壇」～VOYAGE 339「ベネットの回答」)

こうして、海江田の言葉を追ってみてゆくと、「劇画」としては異例の饒舌さであり、従来の「原爆文学」で扱われたことのない領域に踏み込んでいることがわかる。商業作家の最たるものであるはずの漫画家が、延々と退屈な演説シーンに紙面を費やす光景は、異様にすら感じられる。この過剰な言葉に籠る作者の欲求について、夏目房之介は、『マンガと「戦争」』(一九九七年一月・講談社現代新書)の中で、「米国への複雑な愛憎」を背景とした「欧米に啖呵をきりたい」という日本人の欲求の上に、日本が第二次大戦と戦後を越えてきた意味を、つまり戦争を相対化してみせるイメージを加えた、新たな顔を世界に(ことに欧米先進国に)みせてみたいという願望」を見て取る。

ただ、内容をよく吟味すると、キーワードとなっている「コモンセンス」にせよ、「民主主義」にせよ、唱えられている題目は、欧米の「近代」が生み出したものをなぞっているに過ぎない。また、狙撃され、植物人間になった海江田の最後のメッセージである「独立せよ」という言葉には、どこかしらジョン・レノンの『イ

マジン』を髣髴とさせるものがある。海江田が、ニューヨークで凶弾に倒れるという設定自体も、ジョン・レノンの最後をなぞっている。

「団塊の世代」の英雄であるジョン・レノンの思想がどこか反映されることについては、作者の年齢を考えれば不自然ではない。だが、『イマジン』は、九・一一以後のアメリカで、テロと戦う戦意を萎縮させる歌として放送が自粛される一方、平和を願う歌として多くのミュージシャンに取り上げられたことを思う時、その偶然的符合には驚かされる。

作者かわぐちかいじ（本名・川口開治）は、一九四八年、広島県尾道市に生まれ、明治大学文学部国文科在学中の一九六八年、「ヤングコミック」掲載の『夜が明けたら』でデビューした。所謂「団塊の世代」と呼ばれる世代に属し、七〇年安保直前、学生運動が最も過熱した時代に、東京で大学生活を送っている。

無論、これだけのプロフィールから、作品の形成を云々することは不可能だが、同じ被爆県に育った私には、この作品が生まれてきた背景がおぼろげに分かるような気がする。被爆県の子どもたちが叩き込まれる「反核平和教育」は、ある種の「沈黙」を強いる側面がある。私の小学校時代の記憶だが、平和教育の時間、級友の一人が、「二度と原爆を落とされないように、日本も水爆を持ったほうがいいと思う」と無邪気に発言して、教師にたしなめられるということがあった。教師がたしなめた理由は、「核兵器は悪だから」といったものだったが、級友は納得していなかった。黙っただけだった。

『沈黙の艦隊』は、「反核」という絶対の大義の前に沈黙を強

いられて育つ広島・長崎の子どもたちが、納得のいくまで自らの主張を自らの言葉で述べ合い、リアルな「核兵器廃絶の可能性」を追求したロール・プレイのように見える。

先に「平和教育実践事典」の「IV 核を頂点とする軍事状況が、この事典の意図するところと致命的に矛盾しており、中に掲載されている「原爆文学」「原爆児童文学」は、それに何も答えきれないことを指摘した。「事典」の中で、「IV」章だけがリアルな「外部」を描いているからである。『沈黙の艦隊』は、この矛盾を超えることを初めて試みた「原爆文学」のように感じられる。それは、「核を頂点とする軍事状況」について見ぬふりを決め込むのではなく、「平和教育」の現場では、ほとんど扱われない！）まず、そこに焦点を当てるところから出発したために得られた成功であろう。

結び

『沈黙の艦隊』連載時の一九八九年に公開された今村昌平の映画『黒い雨』は、カンヌ映画祭で不評だった。新聞の映画批評欄で、「この映画に描かれる『原爆』は、まるで自然災害のようだ」という外国人ジャーナリストの言葉が紹介されていたように記憶する。私はそれを読んで、「原爆を落とされたことのない国の者には、所詮何も分からないのだ」と腹立たしく思いながらも、被爆体験をそのまま提示する原爆文学が、被爆から五十年を超える歳月を経て、もはや「だからといって何なの？」と受け止められる時代が来ていることを感じた。

原爆は、それ自体が持つ性質（不意の襲来、想像を絶する破壊力）ゆえに、大規模な自然災害のように受け止められざるを得ない面もあるのだが、そればかりではなく、日本では、社会的な文脈の中で、原爆は不可避な自然災害のようなものだったと自分で自分に言い聞かせることを余儀なくされていた経緯がある。

一九四七年九月二十八日、アメリカのスチムソン陸軍長官が「原爆使用が対日地上戦での一〇〇万人の死者を救った」（この数字には何の根拠もないと言われる。一軍人の大雑把な見積もりに過ぎない）と発言し、これが原爆使用正当化の定説となる。日本人の方からも、永井隆博士の「浦上の燔祭」という原爆受容の考え方が出てくる。そして、日米安全保障条約によって、日本はアメリカの核の傘の下に入り、世界に例を見ない経済発展を遂げる。

一九八九年の『黒い雨』は、日本人が、従来どおりのスタイルで、今更ながらに被爆問題を言挙げした作品だった。決して出来の悪い作品ではないのだが、小説『黒い雨』初出の一九六五年とは、作品が置かれるべき「外部」が大きく変化しており、もはや無条件に「原爆文学」の正典が受容されることは難しくなっていた。この「外部」に対する鈍感さ（あるいは、敢えて「外部」に目を閉ざしてしまう姿勢）は、我々が「原爆文学」を取り巻く独特のダブル・スタンダードの言論空間の中で、知らず知らずのうちに形成してしまったものであるように感じられてならない。

ジャン・ボードリヤールは、唯一の被爆国であるが故に、日本のことを「究極の他者」と呼んでいる。『世紀末の他者たち』ジャン・ボードリヤール／マルク・ギョーム・一九九五年・紀伊国屋書店）ボードリヤールは、この言葉を肯定的な意味で使っているのだが、

非常にアイロニカルな響きを感じる。世界から孤絶した、「他者」を持たない日本の言論空間を指摘されているように感じるからである。

突飛な連想で恐縮だが、「ビキニ」という水着がある。この水着は、フランスのデザイナー、ルイ・レアルよって一九四〇年代後半に考案された。その命名はアメリカが核実験を行っていたマーシャル諸島「ビキニ環礁」に由来しており、「水爆クラスの衝撃」を持つ新デザインとして売り出されている。今、日本でも、豊満な女体を「ダイナマイト・バディー」、巨大な乳房を「爆乳」と表現するようだが、「ビキニ」は、それに相通ずる、最も過激な表現だったのである。この水着は、一九六七年に日本に輸入され、ミニスカートと共に大変な流行を見た。

しかし、その一方で、「ビキニ」は、日本人にとって、忌まわしい記憶を持つ名前でもある。一九五四年にアメリカが行った水爆実験（実験名キャッスル・ブラボーII万歳の城）により、日本のまぐろ漁船「第五福竜丸」（静岡県焼津市）が「死の灰」を浴び、乗組員二十三名全員が被爆した。半年後には、無線長の久保山愛吉氏が原爆症で死亡している。この事件が起きた三月一日は、その後「ビキニ・デー」と名付けられ、反核運動の日になっている。この相容れぬはずの二つの「ビキニ」が、互いに「外部」のものとして無関心を装いつつ共存している姿は、日本の「核」を巡る言論が置かれている状況を象徴してはいないだろうか。

林京子氏は、『友よ』（『ギヤマン・ビードロ』一九七八年・所収）の中で、主人公の「私」に、原爆追悼式典に出席している小学生

の健康な「皮膚」に拘泥させる。しかし、そういう言葉が語られる一方で、今、コンビニで雑誌のグラビアページを開けば、「ビキニ」を着た若い女性たちが、年中、健康な皮膚を露わにしている。まさに「究極の他者」としての日本の姿なのかもしれない。

日本の「原爆文学」における「外部」の不在は、正典化した作品を文化財として守り、それで充足してしまうような状況を生じさせつつあるのかもしれない。一九五四年の三月に起きた「第五福竜丸事件」の衝撃は、その年の十一月に水爆怪獣『ゴジラ』という世界に通じるキャラクターを生んだ。『ゴジラ』は、正統な「原爆文学」の外に生じたものであるが、その第一作は、核兵器の不条理な恐ろしさを良く表現している。

本稿を書くために、『沈黙の艦隊』を読み返し、この作品が、「外部」というものが本当に描ききれぬものかどうか、ここでは問わないものとして、劇画としての破綻を問題にせず、過剰なまでに「外部」に挑もうとする創作態度に圧倒されるものがあった。「正典」という「図」は、「外典」という「地」を持つことで、自らの像を浮かび上がらせる。その意味でも、『沈黙の艦隊』が、我々に対し、今まで考えずに済ませてきた「外部」を突きつけた功績は大きい。

「核兵器」を扱った表現に、従来とは違う視点が導入されたと感じたのは、広瀬隆の、『ジョン・ウエインはなぜ死んだか』（一九八二年）を読んだ時だった。アメリカの核実験と被爆の状況を初めて知った。その後、『億万長者はハリウッドを殺す・上・

下』（一九八六年）で、広瀬氏は、米国に巢食う巨大な利権組織である軍産複合体の実態を描き、原爆投機事業の莫大な利益をあげるために、広島と長崎の人びとは焼き殺されたと書いた。これらの本を読むと、現代のアメリカで起きている政治・経済的動きは、何もかもがロックフェラー・モルガン一族の陰謀のように書いてあるので、ある種「とんでも本」のような印象を持たないではなかったが、「なぜ原爆は落とされたのか」ということについて、冷徹な「資本の論理」という「外部」の視点があることを「啓蒙」されたように思う。

『沈黙の艦隊』も、広瀬氏のこれらの著作に負うところは大きいと思われる。アメリカ大統領ニコラス・J・ベネットが、海江田の「核廃絶」「戦争の停止」といった考えを実現しようとした時、それを妨害したのは「軍産複合体」だった。最終的に海江田の命を奪ったのも、「軍産複合体」の仕業であることが暗示されている。

先ほど、「啓蒙」という言葉を使ったが、『沈黙の艦隊』は、「核」と「戦争」を取り巻く世界状況についての啓蒙の書でもあると思う。『VOYAGE303・第4の核戦略・SSSS』には、MAD（相互確証破壊構想）から、SDI（戦略防衛構想）、TMD（戦域ミサイル防衛構想）に至るまでのアメリカの核戦略について手際よく説明されているが、日本が入れてもらっている「核の傘」の論理について、自分がいかに無知であったか、思い知らされた。日本人は概ね軍事に蒙り。この作品が驚きをもって迎えられた理由は、ここにもあるだろう。

(啓蒙を目的とした劇画表現には、故・石ノ森章太郎に経済学を取り上げた有名な先例がある。『沈黙の艦隊』連載中の一九九二年、小林よしのりが『ゴーマニズム宣言』の連載を開始する。周知のとおり、この連載は色々な面で有名になり、この延長上に「啓蒙」的『戦争論』(一九九八年)が書かれることになる。)

二〇〇一・九・一一同時多発テロ事件は、『沈黙の艦隊』が前提としていた世界観を一変させた。『沈黙の艦隊』において、「核兵器」を保有し、使用する存在として前提とされていたものは「国家」であったが、「核」が個人のレベルまで拡散しうる可能性が示されてしまった。旧ソ連で開発されたスーツケース型原爆が、テロリストの手に渡っている可能性があるという報道は、記憶に新しい。

核拡散を扱った小説としては、筒井康隆『アフリカの爆弾』(一九六八年)、篠田節子『斎藤家の核弾頭』(一九九九年)などが挙げられるだろうが、まだ数は少なく、多分に戯画的で(非常に面白くはあるが)、切実な危機として描かれてはいない。

今年の二月から三月にかけて、広島市の平和公園で、千羽鶴への放火事件と慰霊碑へのペンキかけ事件が相次いで起きた。これを知った時、正直言って「またか」と思った。と同時に、このような暗い行為となって噴出せざるを得ない、未だ語られぬ「言葉」が、「核」を巡ってはまだまだあるのかも知れぬとも感じた。

「核」はその存在自体が「物語」を招請し、人はそれに翻弄さ

れる。『沈黙の艦隊』でも、海江田は途中から一貫して『やまと』は核を保持していない」と主張しているにも拘らず、周囲の国々、特にアメリカは「もし保持していたら」という疑惑ゆえに怯え続け、過剰な反応をする。海江田はそこを逆手に取って、「核」を搭載せぬまま、自らの主張を通してゆく。『沈黙の艦隊』は、「核」そのものではなく、「核」を巡る「物語」が人々を突き動かす「物語」でもある。

今、アメリカは、なぜ、あそこまで過剰にテロリストの拠点を破壊するのか、民間人を巻き込んでまでも、アフガニスタンを爆撃したのはなぜか。在庫兵器の一扫、新兵器のテスト等々、いろいろな見方もあるようだが、アメリカは「核」がテロリストに保有された時の怖さをリアルに知っている。なぜなら、自らが「原爆」を投下した経験を持つからである。(ABCC ≡ 米国原爆障害調査委員会は、広島・長崎で被爆者を試験動物のように観察・調査し、膨大な資料を集めた。1951年にABCCが発表した「被爆による母胎の影響は永久的」とする中間報告は、結婚における被爆者差別を生み、それは被爆二世にまでも及んだ。)

私の思い出話で恐縮だが、子供のころ、長崎の原爆資料館に見学に行くと、必ずアメリカ人と思しき白人の姿を見かけた。私は、子供心に、彼らにはこの悲惨な光景がどのように見えているのだろうかと気になって仕方がなかった。

「敵をここまで打ちのめしてやった!」という勝ち誇った気持ちには本当になのか、「アメリカに刃向う奴の末路はこうだ!」

という見せしめの気持ちは本当にならないのか、白人の顔を横目で窺ったものだ。

小学校から高校まで、毎年、夏休み中にもかかわらず、八月九日は登校日で平和教育が実施された。そこでは核兵器の怖さを教えられ、主語不明のまま「このような過ちは二度と繰り返してはならない」ということをテーマとした作文を書かされたりした。そして十一時二分の黙祷。

この平和教育を受けている時、被爆者が苦しさ恐ろしさを訴えれば訴えるほど、「原爆」の威力は神話的なものになり、「兵器」としての優秀さを世界に知らしめることになる、という残酷な矛盾を感じたことがあった。「原爆資料館」は、世界平和を願うものでありながら、同時に「核兵器」の性能を世界に示すデモンストラーションとしても機能しているのではないか、実際、この恐怖ゆえに、世界の核兵器は増殖し続けているのではないか、そういう疑念を抱いたこともある。しかし、こういう考えが、黙るほかない愚かなものであることも分かっていた。

私自身は「全世界の核兵器が廃絶されるべきだ」と素朴に思っ

ている。しかし、一九七三年にジョン・マックフィーが『原爆は誰でも作れる』を刊行し、それに基づいて実際に一九七七年にアメリカの大学生、ジョン・フィリップスがプルトニウム爆弾の設計に成功してみせたことから分かるように、一旦開発された近代科学技術は、もはや取り消せない。核兵器を廃絶しても、核兵器を作る技術は温存されてしまう。この事実が、「核廃絶」の標語を絶望的に空しいものにする。

広島・長崎の原爆関係史跡に対して、いたずら、嫌がらせは絶えない。その背景に、日本の核を巡る言論のダブル・スタンダードがあることを、指摘することは容易いであろう。しかし、その指摘では何も解決しない。廃絶にせよ、保持にせよ、難問が伴う核兵器は、言葉にし難い絶望の深さを「人類」に突きつけ続けているからだ。千羽鶴を焼く行為は卑劣だが、一連の事件は、まだまだ核を語る「言葉」が不足している事実を知らしめているのだと私は感じる。『沈黙の艦隊』の過剰な「言葉」は、「原爆文学」が今後も新たな可能性を切り拓いてゆかねばならぬことを教えている。